慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J .バトラーにおける「パフォーマティヴィティ」の「時間性」
Sub Title	Thinking about temporality in Butler's "Performativity"
Author	大貫, 挙学(Onuki, Takamichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.80- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 14 号（2009）

J. バトラーにおける「パフォーマティヴィティ」の「時間性」

Thinking about Temporality in Butler's "Performativity"

大貫　挙学

１．本稿の目的

本稿は、J. バトラーにおける「パフォーマティヴィティ」の「時間性」を考察するものである。バトラーは、「パフォーマティヴィティ」概念を展開するにあたり、主体化論と言語行為論とを参照している。彼女は、主体の言説的構築を論じるとともに、言語行為の引用／反復のなかに、攪乱の可能性があることを強調する。すなわちバトラーは、パフォーマティヴィティに、過去の沈殿と、未来の偶発性という２つの側面を見出している。フェミニストとしてのバトラーにとって、異性愛体制が構築されていることを批判するのみならず、現行秩序の脱構築を試みることが必要だからだ。本稿では、とくに言語行為における「過去」と「未来」の関係に焦点を当て、「社会」を「語る」ときのひとつの作法を模索したい。

ここで予め議論の構成を示しておこう。まず、ラカン派の「現実界」をめぐるバトラーと S. ジジェクの論争を、「構造」と「時間」の関係を問い直すものとして把握する（→２）。ラカン派精神分析は、そのファロゴセントリズムゆえに、フェミニズムから批判されてきた。だが、バトラーの指摘はそれにとどまるものではない。彼女の議論は、「現実界」概念の非歴史性を問題とするものと解すことができるのだ。そのため次に、バトラーにおける「歴史性」の位置づけを確認する（→３）。その際、彼女による言語行為論の再解釈に着目し、「歴史性」を単なる時間的変化と捉えるべきではないことを明らかにする。これらをふまえて最後に、「構造」それ自体が「時間性」を有していること、現在を語ることのなかに未来の偶発性があることを主張する（→４）。

２．精神分析的主体のパフォーマティヴィティ

（１）バトラーの「現実界」批判

バトラーは、M. フーコーに依拠しながら、権力による主体化を論じる。とりわけ、性別二元論や異性愛体制を批判する彼女にとって、性別カテゴリー自体が、言説的に構築されたものとなる。

> フーコーは、権力の法システムはまず主体を生産し、のちにそれを表象すると指摘した。……この分析が正しければ、女を、フェミニズムの「主体」として表象しようとする言語

> や政治の法組織は、表象の政治の既存の一形態を言説で組み立てたもの、その結果にすぎないということになる。（Butler 1990＝1999：20）

すなわち、性別カテゴリーは、言語によって／の内部でのみ意味づけられる。こうした立場からバトラーは、言語の外部を予め設定するような思考を斥ける。このことは、「現実界」についてのジジェクとの議論のなかに、先鋭的にあらわれる。

ラカン派の批評家であるジジェクは、「〈現実界〉は、象徴化に抵抗する硬い頑固な核である」（Žižek 1989＝2000：257）と述べ、偶発性の契機を「現実界」に求める。言語的な秩序に回収されえない領域があることによって、社会は別様な可能性に開かれるというのだ。「社会的領域を統一しよう、ある社会現象に社会構造における特定の場所を振り当てようという試みはかならず失敗する運命にある」（Žižek 1989＝2000：249）。

J. ラカンによれば、「自我の発達は、主体が象徴体系に統合され」ることで生じる（Lacan 1975a＝1991(上)：139）。ここで主体化は、シニフィアンの秩序たる「象徴界」への参入として説明されるが、こうした象徴化から逃れ去る次元を「現実界」という。また、「フロイトへの回帰」を唱えるラカンにおいて、象徴界を統べるのは「父の法」であり、象徴界と現実界の淵を限界づける「特権的なシニフィアン」は「ファルス」と呼ばれる。そして、このファルスとの位置関係（象徴界への参入の形式）によって、二種類の性別が導かれるという。すなわち男性は、象徴的秩序のなかで主体の地位を与えられ、女性は、男性主体を成立させる客体とみなされる。そのため、女性は象徴界の内部では、「不可能なもの」としてしか表象されえない（Lacan [1958] 1966＝1981；1975b：ch. 6, 7）。

このような図式は、男性支配の領域としての象徴的秩序を自明視するものといえる。ラカンにおいては、象徴界成立の機制がすでにジェンダー化されているのだ。さらに、それと関連してバトラーが問題とするのは、言語の外部としての「現実界」が想定されている点である。「この推論的な起源は、つねに回顧的な地点からのみ思考されるものであり、……この語りの戦略は、回復不能な起源と永遠に置換される現在との区分にいつまでもかかずらわって、攪乱の名でその起源を回復しようとするあらゆる試みをつねに遅延させる」（Butler 1990＝1999：146-7）。それゆえ、ジジェクによる偶発性の説明は、「偶発性の『偶発性』を空虚にする」（Butler 1993：196）。

> 実際、かれの理論は、あらゆるイデオロギー編成に先立つ「法」を安定させることになるが、それは、男性的なるものを言説や象徴界の内部に、女性的なるものを「汚点」や「言説の回路の外部」に位置づける、という重要な社会的・政治的な含意を伴う。（Butler 1993：196）

これに対しジジェクは、バトラーのラカン解釈は「内容への非弁証法的な強迫観念」（Žižek

1994＝1996：336）にもとづくものだと反論する。「〈現実界〉は超越的でポジティヴな実体ではない。つまり、……象徴的秩序の彼方のどこかに存続しているものではない」（Žižek 1989＝2000：262-3）。また、「ファルス」や「父の法」は、生物学的な性差とは無関係であり、「象徴化それ自体の形式」（Žižek 1994＝1996：337. 強調は引用者）を意味するのだという[1)]。

なるほど、ジジェクが引用するように、ラカンも「〈現実界〉は、形式化の行き詰まりを通してのみ記録されうる pent s'inscrire」（Lacan 1975b：85. ただし日本語訳は、Žižek 1989＝2000：262 による）と述べており、この限りでは、「現実界」は、バトラーがいうような「前－社会的領域」（Butler et al. 2000＝2002：218）ではない。だが、そもそも「形式」にすぎないものが、「父」や「ファルス」といった「異性愛の親子関係」の語彙で示されるのが、バトラーには「理解に苦しむ」ことなのだ（Butler et al. 2000＝2002：206）。またラカンは、去勢（象徴界への参入）の構造について、「生物学的事実に還元しても解決できない」（Lacan [1958] 1966＝1981：148）と指摘するものの、結局は、性差を「人間がその材料になっている言語の構造」による不可避な「人間の条件」だとみなしている（Lacan [1958] 1966＝1981：151-2）。ラカン理論では、「形式」としての言語の構造が、性差という「内容」を帰結することになるのだ。

したがって、ラカン派の「現実界」概念は、バトラーの批判から完全に自由であるとはいえない。

（2）偶発性と言語の非完結性

しかし本稿において重要なのは、ラカン解釈の妥当性ではない。むしろ問いたいのは、偶発性をいかなる水準で捉えるのかということである。ジジェクによれば、現実界的なるものを否定したら、バトラーが論じるようなパフォーマティヴィティを理論化することもできない。

> どんな歴史主義も、その領野を規定する最小限の「非歴史的な」形式的枠組みに依存しており、そこで偶発的な包摂／排除、置き換え、再交渉、ずらしといった終わりなき開かれたゲームが起こる。とことんラディカルに歴史的偶発性を主張するなら、歴史的変化それ自体と、その（不）可能性の条件であるトラウマ的で「非歴史的」な核との弁証法的緊張がなければならない。（Butler et al. 2000＝2002：150〔ジジェク執筆部分〕）

ジジェクにとって、現実界はパフォーマティヴィティを説明するいわば「メタ言語」なのである。

一方でバトラーも、批判的な再読とともにではあるが、しばしば精神分析の概念を用いている。彼女は、フーコーの問題意識を受け継ぎつつも、フーコーにおいては、主体化に伴う排除の側面が軽視されていると指摘する（Butler 1996：68）。たとえば、異性愛社会においては、同性への愛が予め排除されることで、異性愛者としての主体が成立する。それゆえ「同性愛者」は、その存在を無視され、「言説の場を占めることが」できない（Butler [1991] 1993＝1996：

123)。あらゆる主体は、自我のなかの他者性を否定・棄却し続けることによって成立しているのだ[2)]。主体化に伴うこうした排除の暴力に目を向けることが、バトラーの理論的／政治的スタンスだといえよう。彼女によれば、このような問題を扱うことができるのが精神分析の枠組なのである。

バトラーは、パフォーマティヴな攪乱の可能性を、「想像界」に求めている。ラカンにおいて、「想像界」とはイマーゴが機能する次元で、幼児期の母子関係に典型的とされる。子どもは母の反応を「鏡」として、自我を認識し始める（Lacan [1949] 1966＝1972：127）。そして、この二項関係に大文字の他者たる父が介入することで、子どもは、言語の領域（象徴界）に参入する。想像界はアイデンティティ形成の場といえるが、バトラーは、それを象徴界が必然的に有している非完結性として位置づけ直すのである。「想像界はたしかに、法に占領され、法によって構造化されているが、直接には法に従うわけではない」（Butler 1997b：96）。こうして、主体化のただなかに脱主体化の契機が見出される。

だとすれば、ジジェクによって好意的に解釈された現実界と、バトラーによる想像界の再読は、言語の非完結性という点では一致する。バトラー自身、「わたしたちは《現実界》が意味していることはただ一つ、主体の構成上の限界だけだという考えを受け入れてもいる」（Butler et al. 2000＝2002：206）と述べている。しかし、たとえジジェクによって再構成された形ではあっても、「抵抗の様態としての現実界を想定」（Butler 1993：207）することを、バトラーは拒絶するのである。

このようにバトラーは、「主体形成の不完全さ」（Butler et al. 2000＝2002：24）を前提としながらも、ジジェクの「現実界」解釈に執拗な批判を繰り返す。いったい、バトラーは何にこだわっているのか。一般に、このことはバトラーの理論的混乱とみなされてきた[3)]。だが本稿では、バトラーの議論に非一貫的な部分があることを認めつつも、バトラーの「こだわり」に寄り添ってみたい。

バトラーは、ジジェクによる「歴史性の空間を支えるのはまさに、象徴化のプロセスの内的な限界としての『非歴史的な』切断線なのだ」（Butler et al. 2000＝2002：285-6）という記述に対し、次のように述べている。

> おそらく歴史性の「空間」という形象を字義通りに受け取ってはいけないのだろうが、時間性を提示するために選ばれた形象が、時間性を含みつつも、時間性を否定しているということは非常に印象的なことである。さらに言えば、この対立は完全に克服されることがなく、あらゆる種類の歴史化の内なる（不変の）形象として設定されているようだ。したがってこの見解においては、あらゆる歴史性の中心には、その核には、非歴史的なものがあるということになる。（Butler et al. 2000＝2002：362-3）

ここで問題となるのは、「歴史」（時間性）と「構造」（空間）の関係、あるいはそうした区別

それ自体である[4)]。おそらく彼女は、言語の非完結性を必然としながらも、それを歴史性の「条件」とみなすことに同意できないのだろう。そこで次に、バトラーにおける「歴史性」の位置づけを確認することとしよう。

３．言語行為の時間性

（１）言語行為による主体の（脱）構築

バトラーは、パフォーマティヴィティの歴史性を重視するが、とくにそれは、言語行為論の再解釈のなかで述べられることになる。それゆえ、言語行為論をめぐる彼女の議論を検討することで、歴史性を考察する手がかりとしたい。

「パフォーマティヴ」という語は、いうまでもなく J. L. オースティンの言語行為論に由来する。オースティンは、従来の哲学者たちが、陳述文の役割を「事実」の「記述」と捉えてきたことを批判する（Austin 1962＝1978：4）。かれはまず、「私は約束する」など、「言うこと」がそのまま「行うこと」になる発話を「行為遂行的発言 performative utterance」と呼び、事実の報告たる「事実確認的発言 constative utterance」から「予備的」に「分離」した（Austin 1962＝1978：8-13）。だが、両者を区別する基準を維持することは不可能である。あらゆる陳述は、状況に応じて、行為遂行的な性質をもつこともあれば、事実確認的な性質をもつこともあるからだ（Austin 1962＝1978：118）。

こうしてかれは、発話にかかる行為の３つの側面という観点から「言語行為の一般理論」を構築することになる。すなわち、①「何ごとかを言う」という「発語行為 locutionary act」、②発語行為の遂行それ自体「において in」なされる「発語内行為 illocutionary act」、③発語行為や発語内行為の遂行「によって by」、「いまひとつ別種の意味の行為を遂行することであるというような言葉の使用の第三の意味」としての「発語媒介行為 perlocutionary act」である（Austin 1962＝1978：164-77）[5)]。

オースティンの議論は、発話の「力」（効果）に着目したものとして、多くの理論家に影響を与えてきた。バトラーも、主体化を言語の効果とみなしている[6)]。

> ジェンダーは結局、パフォーマティヴなものである。つまり、そういう風に語られたアイデンティティを構築していくものである。この意味でジェンダーはつねに「おこなうこと」であるが、しかしその行為は、行為のまえに存在すると考えられる主体によっておこなわれるものではない。（Butler 1990＝1999：58）

オースティンの場合は、言語行為を行う主体が存在することになるが[7)]、バトラーにあっては、言語行為による主体の構築こそが強調される（Butler 1997a＝2004：39-40）。彼女は、主体化それ自体の暴力性に批判的な眼差しを向けるとともに、言語行為による脱主体化の可能性をも指摘するのである。そしてここから、ポルノグラフィやヘイト・スピーチの検閲を正当化

するような議論に異議を唱えることになる。

フェミニズム法学者である C. A. マッキノンは、「言論は行為なのである」（Mackinnon 1994＝1995：49）と述べ、ポルノグラフィを「表現の自由」の建前のもとに擁護する「リベラル」な法的言説を批判する。彼女によれば、「ポルノグラフィを『表現』として構築することの危険性は、ポルノグラフィがやっていること、つまり性行為（セックス）を通じて女性を従属させることに憲法上の保障を与えてしまうことである」（Mackinnon 1994＝1995：48）。マッキノンにおいて、ポルノグラフィは「発語内行為」とみなされているのだ。

しかし、バトラーによれば、特定の発話を成り立たせている歴史性を無視し、現在の時点で、「それを生みだす意図や起源の配備に結びついているとみなしてしまうと」（Butler 1997a＝2004：23）、発話の意味を固定させることになる。たしかにポルノグラフィやヘイト・スピーチは、他者を（ときに）従属的な存在として主体化するが、検閲も「主体を形成したり、発話の合法的な境界を作り上げてもいる」（Butler 1997a＝2004：206）点では同様である。オースティン自身や、かれの言語行為論を発展させた他の理論家が、「発語内行為」を重視するのとは対照的に、バトラーは、「発語媒介行為」の概念に、オースティン理論の意義を見出すことになる。

> もしも中傷的な発話の行為遂行性を、発語媒介行為のようなものと考えるなら（発話は効果をもたらすが、効果そのものでないならば）、そのような発話は、一連の不必要な効果を生産したという理由でのみ、中傷的な効果を与えるものとなる。したがってそれとはべつの効果がその発言から生じることになれば、そのときこそ、そういった発言を利用し、逆転させ、べつの文脈を与えることが可能となる。他方、もしも法的手段が、ヘイト・スピーチを発語内行為とみなす見方をとるかぎり（発話が中傷的な効果を、発話と同時に不可避的に行使するかぎり）、対抗発話によってその種のヘイト・スピーチを無害にする可能性は、閉め出される。（Butler 1997a＝2004：61-2）

たとえば、「クィア（変態） queer」という語は、もともとは「侮蔑語」であったが、それが戦略的に転用されることによって、正常／異常、異性愛／同性愛という既存のカテゴリーを攪乱することにもなった（Butler 1997a＝2004：23-4）。

ポルノグラフィによる「正しくない」主体化に対して、マッキノンが「正しい」主体の構築を志向しているのだとしたら、バトラーは主体の脱構築に希望を求めているのだといえよう。こうした「再意味づけ」を可能にするには、言語の流通を開いたものにしておかなければならない。バトラーは、時間的な隔たりのなかでの言語行為の「効果」に注目するのである。

（2）主体とコンテクストの問題

バトラーにとっては、主体が言語行為を行うのではなく、言語行為の「引用」によって、「起

源」としての「主体」が遡及的に設定される。したがって、言語行為を成り立たせているコンテクストが重要となる。

オースティンもまた、言語行為のコンテクストに言及している。かれは、言語行為が「適切」に遂行されるための「必要条件」として、「慣習的な手続」の存在をあげる[8)]。そして、「その手続きは……、ある一定の言葉の発言を含んでいなければならない」（Austin 1962＝1978 : 26）という。バトラーは、「行為遂行性の機能」を「発話者の意図」に還元していないとして、オースティンを評価しつつも（Butler 1997a＝2004 : 39）、「慣習」が「不動」とされていることを批判する。

> ひとたび慣習が設定され、行為遂行性が慣習表現に加われば――そしてあらゆる状況が適切であれば――言葉は行為となる。洗礼は執り行われ、犯罪の容疑者は逮捕され、異性愛カップルは結婚する。（Butler 1997a＝2004 : 226）

さらに続けてバトラーは、オースティンにおいては、言語行為のコンテクストとして、もっぱら言語の使用法のみが着目され、「社会制度の権力」についての「理論」が不十分であると指摘する（Butler 1997a＝2004 : 226）。そして、この点を明確に批判しているのが、P. ブルデューであるという（Butler 1997a＝2004 : 226）。

ブルデューによれば、言語行為の効果は、言語の内部にではなく、社会的条件としての発話者の権威に基礎づけられる。「行為遂行的発言は、それを発言する『権力』をもつ人物によって発せられないのであれば、常に失敗することが運命づけられている」（Bourdieu 1991 : 111）。かれは、言語の「外部」の社会的権力を重視するのである（Bourdieu 1991 : 109）。

だがバトラーは、ブルデューに完全に同意するわけではない。ブルデューにあっては、「行為遂行的発言を行う主体は完全に固定的な形で社会的権力の分布図上に位置づけられて」（Butler 1999 : 122）おり、発話主体の構築が説明し損われている。また、「行為遂行的発言が作動するか否かは、発話主体が……予め権威づけられているかどうかによる」（Butler 1999 : 122）ことになり、これでは、社会制度の変容を論じられない。「事前には権威づけられていない権利を主張することによって、……既存の正統的慣例を転覆させる」（Butler 1997a＝2004 : 228）こともありうるのだ[9)]。

このようなバトラーの議論は、J. デリダによるオースティン批判を想起させる。デリダの批判は、いわゆる「現前の形而上学」に対するものだが、より具体的には、言語の「寄生的」用法についてのオースティンの扱い方に向けられる。オースティンは、舞台での語りや、詩のなかでの発言を、「特殊な状況」における「言語褪化」として、理論から「除外」しようとした（Austin 1962＝1978 : 38）。しかし、オースティンが「寄生的」用法に見出した言語の引用的性質を、デリダは、行為遂行的な力の「構造的必然性」だと考える。「あるパフォーマティヴな発言は、もしもそれを決まり文句として言う行為が一つの『コード化された』……発言を反復するので

なかったら、成功しうるであろうか」（Derrida 1990＝2002：44）。

言語行為の引用的性質は、既存の文脈からのズレが生じうることを示している。こうして、「脱文脈化」の可能性が開かれる。バトラーもデリダに依拠して、パフォーマティヴィティ概念を練り上げている。「繰り返しは単なる同じものの写しではないことを思い起こしたい」（Butler 1993＝1997：162）。しかし、デリダの議論では「行為遂行性の『構造的性質』」を「社会的文脈」から「完全に分離」させるという問題が生じてしまうともいう（Butler 1997a＝2004：229）。「反復の論理」は、言語の「形式的」構造としてではなく、「社会的論理」として理解しなければならない（Butler 1997a＝2004：232）。

ブルデューにおいては、コンテクストとしての社会制度が、言語の外部に固定されたため、言語行為の時間性が「時をつうじて慣習が沈殿している不動な社会的文脈」（Butler 1997a＝2004：226）に回収される。一方、デリダの場合は、言語行為が、社会的コンテクストから完全に断絶されてしまっている。ようするに、言語行為を、過去に規定されるものとみることも、過去から切り離されたものと捉えることも、ともに避けなくてはならない。コンテクストそれ自体の時間性を考えるべきなのだ。

> 儀式における「瞬間」は、凝縮された歴史性である。それは過去や未来へと拡大し、発話のまえやあとを呼びおこす効果をもち、したがって発話の瞬間を構築すると同時に、その瞬間から逃げ去りもする。（Butler 1997a＝2004：6）

いささか思わせぶりなこのフレーズの含意は重要だろう。言語行為は、過去のコンテクストとの関係で可能になるが、それはまた、既存のコンテクストを呼びおこすものでもある。そして、その瞬間の言語行為が、新たなコンテクストに接続されるとともに、過去のコンテクストもまた新たなコンテクストとの関係において有意味となる。

言語行為における歴史性とは、〈過去→現在→未来〉という単純な因果の連鎖を意味するものではない。バトラーは、「発話の状況は、空間や時間の範囲を確定することによって簡単に定義できるような、単純な文脈ではない」（Butler 1997a＝2004：7）と述べている。ある言語行為が依拠しうるコンテクストそれ自体は、一義的に決定できるものではないのだが、それは、言語行為の瞬間において過去と未来が召還されるからだ。

４．「パフォーマティヴィティ」における「歴史」と「構造」

ここまでの議論を整理しよう。ジジェクが「現実界」にこだわるのは、歴史的偶発性を説明するためであった。つまり、言語構造がすべてを決定しつくせないこと、それゆえ、主体化は必ず失敗することが示されているのである。しかしバトラーは、ジジェクにおける歴史性の軽視を指摘する。言語の非完結性という「構造」に、「歴史的」領野たる偶発性を従属させることになるからだ。これに対し、「歴史性」をより重視するのがバトラーの立場といえる。バトラー

は、言語行為論を再構成するにあたり、時間軸を導入している。言語行為は、既存のコンテクストに規定されながらも、新たなコンテクストを切り拓く。コンテクストは時間的な非決定性を帯びているのだ。

では、バトラーによるジジェクへの批判と、彼女が強調する言語行為の時間性とは、いかなる関係にあるのだろうか。改めて、「パフォーマティヴィティ」概念における「歴史」と「構造」の問題について考えたい。

バトラーは、「主体形成の不完全さは、政治的特徴であって構造的な静態や基盤でない排除をつうじ、まさに〈過程にある主体〉が構築されるから」（Butler et al. 2000＝2002：24）だという。「主体形成の不完全さ」、すなわち言語の非完結性は、ジジェクにとっては、パフォーマティヴィティの原因であったが、バトラーにおいては、むしろそれ自体がパフォーマティヴに構築されているのである。もちろん、ジジェクならば、そうしたパフォーマティヴィティを条件づけるのが、現実界なのだと、さらに反論するかもしれない。

だが、「歴史」を「構造」と対比させ、前者に優先的地位を与えるものとして、「パフォーマティヴィティ」概念を捉えるべきではない。本稿でみてきたように、言語行為の「歴史性」とは、言語「構造」の「通時的」変化を示すものではないからだ。

この点、「共時態というのは……通時態の一部」（Jakobson 1985＝1995：43）だとする R. ヤコブソンの指摘は示唆的である。かれは、以下のような例をあげ、F. ソシュールにおける共時態／通時態という対比[10]を批判する。

> 私はそれなりの意味があって映画の知覚を例にとりました。もし観客に共時的状態に関する質問をしたならば――たとえば、この瞬間、あなたはスクリーン上に何を見ていますかというような――その人は、必然的に共時的答えをするでしょう。しかし、それは決して静的なものではありません。というのも、その瞬間観客は、馬が走っていたり、道化が宙返りをしたり、悪漢が銃弾を受けたりしているのをみているからです。（Jakobson 1985＝1995：14）

かくしてヤコブソンによれば、「共時的・通時的、静的・動的という二つの明確な対立は、現実には符合しない」（Jakobson 1985＝1995：14）。「『構造』に時間軸がある」（Butler 1997a＝2004：31）というバトラーの指摘は、ヤコブソン同様、構造自体の歴史性を述べたものと考えられる。

もっとも、ヤコブソンの文学批評は、言語の静態的構造のみを扱っていると批判されてきた。また、「進化はつねに体系的性質をもつ」（Jakobson 1985＝1995：36）というヤコブソンの議論は、バトラーが論じる攪乱とは相容れないものである。かれは「共時態」の「動的」性質を論じる際に、次のように述べている。「原点と変化の最後の相という二つの要素が、同時にある期間一つの言語共同体のなかに存在し、両要素がスタイル上の異形として共存するのだ」

（Jakobson 1985＝1995：43）。ここでは、過去から現在までの推移が素朴に想定されている感は否めない。

バトラーにおける時間性は、非決定性や未来の偶発性をより強調したものといえる。彼女は、言語行為論を再構成するにあたって、コンテクストの決定不能性に着目していた。

たしかに、個々の言語行為は、既存のコンテクストとの関係において可能となる。言語行為は過去から切り離されたものではありえない。だが言語行為によって、新たなコンテクストへの接続がなされることになる。ここに脱主体化の契機がある。もちろん、主体化が言語的なものである以上、私たちは言語による被傷性から逃れられない。それゆえ、コンテクストを、（それらに依拠しながら）絶えず脱文脈化していくしかない。だが、ここで重要なのは、既存のコンテクストとされるもの自体、一義的には決定できないということだ。既存のコンテクストは言語行為の結果としても立ち現れるのである。すなわち、ある「瞬間」における既存のコンテクストの発見は、それ自体が言語行為である。そして、既存のコンテクストを問題化するという新たなコンテクストがその「瞬間」に現れる。同時に、既存のコンテクストは、それが接続されうる新たなコンテクストとの関連においてのみ意味をもつ。言語行為は、コンテクストに規定されながらも、それが依拠するコンテクストや、新たなコンテクストを呼びおこすのである。

こうして、「構造」と「歴史」の二元論が問い直されることになる。言語「構造」の非完結性とは、「時間」的な非決定性でもある。パフォーマティヴィティは、既存の言語構造（の非完結性）のなかで生じるが、そうした言語構造もまた、パフォーマティヴに現れる。言語の非完結性自体が時間性を有しており、それが、パフォーマティヴィティの機制である。パフォーマティヴィティの「瞬間」に、構造の出現と攪乱が、いわば同時達成的になされるのだ。

既存の権力を批判し、それらに名前を与えるとき、社会は固定的に語られがちとなる。たとえば、フェミニズムは男性支配のシステムを「家父長制」と名づけることで、その弾劾対象を特定してきた。しかし、このような語り方は、今日疑問に付されている。「『女の抑圧』というあらかじめ構成されたカテゴリー観」や、「女を抑圧する単一のメカニズムがある」という前提は否定されるようになったのだ（Laclau and Mouffe 1985＝1992：188）。バトラーも、「家父長制の法を規制的な構造とみなしてしまうこと」（Butler 1990＝1999：78）への懐疑を表明している。他方で、非決定性や偶発性を強調するとき、既存の権力に対する直接的な批判を行うことの困難がある。バトラーは、性別二元論を自然化する権力のあり方を、当初、「異性愛のマトリクス heterosexual matrix」と呼んでいたが、構造を固定的に捉えることを避けるため、後に「異性愛のヘゲモニー heterosexual hegemony」と表記するように改めたという（Butler 1994＝1996：56-7）[11]。彼女も、批判対象の特定と攪乱の強調とのあいだで葛藤してきたのかもしれない。

だが、あえて批判対象としての権力をパフォーマティヴに名指し、未来の偶発性のための接続可能性を見出していくという語り方もあるのではないだろうか（cf. 大貫 2007：68）。未来

の偶発性は現在を語ることと無縁ではない。むしろ、既存の構造を語ることのなかに、構造の攪乱の契機があることになる。パフォーマティヴィティの時間性をこのように理解するとき、言語行為についての理論と、権力を批判するという言語行為とは不可分なものとなるだろう。

〔付記〕本稿は、第 81 回日本社会学会大会における口頭報告「J. バトラーにおける言語行為（論）と時間性」（2008 年 11 月 24 日、東北大学川内北キャンパス）をもとに執筆したものである。

【註】

1) とはいえジジェクも、「映画『エイリアン』に出てくるエイリアンは前ー象徴的な、きわめて母性的な〈物〉である」（Žižek 1989＝2000：205）と述べるなど、しばしば、「現実界」を具体的な内容とともに語っている（cf. 大貫 2007：64）。また、ジジェクが性差を前提にしているという点については、竹村（1996）も参照。

2) それゆえバトラーは、「異性愛欲望を思考不能なものとする同性愛者」の主体化にも言及する（Butler 1990＝1999：133）。ただし彼女によれば、それを異性愛者の主体化と「同列に扱うことはできない」（Butler 1990＝1999：133）。なぜなら、「異性愛者による一次的な同性愛の否定は、同性愛の禁止という文化的な強制によってもたらされるもの」（Butler 1990＝1999：133）だからだ。

3) たとえば、村山敏勝は次のように述べている。「主体は（記号は、シニフィアンは）自分自身と一致することがないという点は彼女も全面的に認めているのだから、提示している『構造』――彼女自身は否定的にしかこのことばを使わないとはいえ――が〔ジジェクの議論と〕変わるわけではない」（村山 2005：174. 〔　〕内は引用者）。

4) この点、佐藤嘉幸は、バトラーによるジジェクへの批判を、次のように整理する。「『現実界』が常に同じ形式で主体と構造を規定するとすれば、そのとき歴史性の領野は消去されてしまう。それは、構造変動という通時的問題を扱うことができない、ということだ」（佐藤 2008：216）。しかし後に述べるように、本稿では、「構造」と「歴史」、「共時」と「通時」という区分自体を再検討したいと思う。また竹村和子は、「現実界」を「パフォーマティヴな行為そのものの『原因』であり、同時に『結果』」（竹村 1996：208）でもあるという。竹村によれば、「『偶発的』なものを『必然』にすりかえるイデオロギー作用は、主体構築の前になされるのではなく、主体構築のまさにその時点でおこなわれる」（竹村 1996：207-8）。本稿の課題は、主体構築の「その時点」で時間性がいかに作用しているのか考察することにある。

5) 「例えば、『私は明日必ず来ることを約束します』という私の発言は、そのような音声を発することとしてまず発語行為の遂行であり、同時にその発言のもつ本質的な力としての『約束』という発語内行為の遂行であり、そして最後にその結果として、たとえば対話者を安心させるという発語媒介行為の遂行なのである。」（立川・山田 1990：173）

6) もっとも、Butler（1990＝1999）の段階では、オースティンへの直接的な言及はなされていない。オ

ースティンに焦点が当てられるようになるのは、Butler（1997a＝2004）においてである。

7) このことを象徴しているのが、「発言原点 utterance-*origin*」（Austin 1962＝1978：107）という言葉である。

8) より厳密にいえば、オースティンは、まず、行為遂行的発言の「適切性」条件のひとつとして、慣習をあげている。かれは、発語行為と発語内行為についても「慣習を含んでいる」（Austin 1962＝1978：183）としているが、発語媒介行為に関しては次のように述べている。「非慣習的 non-conventional な手段（あるいは普通の言い方では『反慣習的 unconventional』な手段）、すなわち、まったく慣習的でないか、当該目的にとって慣習的でない手段によって達成できることは確かである」（Austin 1962＝1978：197）。

9) ここでバトラーは、アメリカ南部の人種隔離政策に抵抗するためバスの前方に座った R. パークスの例をあげている。

10) ソシュールは、「通時態 diachronie＝時間軸に沿って展開する期間 période」と、「事象の状態（言語）」「平衡点 équilibres（項と価値のあいだの関係の平衡点）」たる「共時態 synchronies」とを区別し、「同時にふたつの視点を扱うことはできません」と述べている（Saussure 1910＝2007：135）。

11) なお、バトラーは「『問題なのは肉体だ Bodies That Matter』では、異性愛のマトリクスという言葉はどこにも使っていません」（Butler 1994＝1996：57）と述べているが、同書にも「異性愛のマトリクス」という用語は確認できる（e.g. Butler 1993：65）。

【文献】

（※訳文の引用に際しては、文脈に応じて、適宜、改訳や原語の補足等を行った。）

Austin, J. L., 1962, *How to Do Things with Words*, London: Oxford University Press.（＝1978, 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店.）

Bourdieu, Pierre (John B. Thompson ed./ Gino Raymond and Matthew Adamson trans.), 1991, *Language and Symbolic Power*, Cambridge: Harvard University Press.

Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York and London: Routledge.（＝1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.）

Butler, Judith, [1991] 1993, "Imitation and Gender Insubordination," Henry Abelobe, Michèle A. Barale and David M. Halperin eds., *The Lesbian and Gay Studies Reader*, New York and London: Routledge, 307-20.（＝1996, 杉浦悦子訳「模倣とジェンダーへの抵抗」『imago』7(6)：116-35.）

Butler, Judith, 1993, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*, New York and London: Routledge.（＝1997, クレア・マリィ抄訳〔第 8 章のみ〕「批評的にクィア」『現代思想』25(6)：159-77.）

Butler, Judith (interviewed by Peter Osborne and Lynne Segal), 1994, "Gender as Performance: An Interview with Judith Butler," *Radical Philosophy*, 67: 32-9.（＝1996, 竹村和子訳「パフォーマンスとしてのジェンダー」『批評空間』第Ⅱ期 8：48-63.）

Butler, Judith, 1996, “Sexual Inversions,” Susan J. Hekman ed., *Feminist Interpretations of Michel Foucault*, University Park: The Pennsylvania State University Press, 59-75.

Butler, Judith, 1997a, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York and London: Routledge.（＝2004，竹村和子訳『触発する言葉――言語・権力・行為体』岩波書店.）

Butler, Judith, 1997b, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Stanford: Stanford University Press.

Butler, Judith, 1999, “Performativity’s Social Magic,” Richard Shusterman ed., *Bourdieu: A Critical Reader*, Oxford and Massachusetts: Blackwell, 113-28.

Butler, Judith, Ernesto Laclau and Slavoj Žižek, 2000, *Contingency, Hegemony, Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, London and New York: Verso.（＝2002，竹村和子・村山敏勝訳『偶発性・ヘゲモニー・普遍性――新しい対抗政治への対話』青土社.）

Derrida, Jacques, 1990, *Limited Inc.*, Paris: Galilée.（＝2002，高橋哲哉・増田一夫・宮﨑裕助訳『有限責任会社』法政大学出版局.）

Jakobson, Roman, 1985, *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time*, Minneapolis: University of Minnesota Press.（＝1995，浅川順子訳『言語芸術・言語記号・言語の時間』法政大学出版局.）

Lacan, Jacques, [1949] 1966, “Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je,” *Écrits*, Paris: Seuil, 93-100.（＝1972，宮本忠雄訳「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階――精神分析の経験がわれわれに示すもの」『エクリ（Ⅰ）』弘文堂，123-34.）

Lacan, Jacques, [1958] 1966, “Die Bedeutung des Phallus,” *Écrits*, Paris: Seuil, 685-96.（＝1981，佐々木孝次訳「ファルスの意味作用」『エクリ（Ⅲ）』弘文堂，145-62.）

Lacan, Jacque, 1975a, *Le séminaire de Jacques Lacan: Livre Ⅰ*, Paris: Seuil.（＝1991，小出浩之・小川豊昭・小川周二訳・笠原嘉・鈴木國文訳『フロイトの技法論（上/下）』岩波書店.）

Lacan, Jacque, 1975b, *Le séminaire de Jacques Lacan: Livre XX*, Paris: Seuil.

Laclau, Ernesto and Chantal Mouffe, 1985, *Hegemony and Socialist Strategy*, London and New York: Verso.（＝1992，山崎カヲル・石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治――根源的民主主義のために』大村書店.）

MacKinnon, Catharine A., 1994, *Only Words*, London: Harper Collins.（＝1995，柿木和代訳『ポルノグラフィ――「平等権」と「表現の自由」の間（はざま）で』明石書店.）

村山敏勝，2005，『（見えない）欲望へ向けて――クィア批評との対話』人文書院.

大貫挙学，2007，「主体と社会のパフォーマティヴィティ――J. バトラーにおけるふたつの他者性をめぐって」『年報社会学論集』20：61-71.

佐藤嘉幸，2008，『権力と抵抗――フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセール』人文書院.

Saussure, Ferdinand de, 1910, *3 ème cours de linguistique générale.*（＝2007，影浦峡・田中久美子訳『一般言語学講義――コンスタンタンのノート』東京大学出版会.）

竹村和子，1996，「〈現実界〉は非歴史的に性化されているか？――フェミニズムとジジェク」『現代思想』

24(15)：196-210.
立川健二・山田広昭，1990,『現代言語論――ソシュール フロイト ウィトゲンシュタイン』新曜社.
Žižek, Slavoj, 1989, *The Sublime Object of Ideology*, London and New York: Verso.（＝2000，鈴木晶訳『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社.）
Žižek, Slavoj, 1994, *The Metastases of Enjoyment: Six Essays on Woman and Causality*, London and New York: Verso.（＝1996，松浦俊輔・小野木明恵訳『快楽の転移』青土社.）

（おおぬき　たかみち　東洋大学社会学部非常勤講師）